

回答

三先生への回答

思 沁 夫

今後の研究に非常に参考になる、好意的なご意見をお寄せ頂き誠にありがとうございます。

概要で述べましたように、本稿は私の研究成果を発表するものではありません。個人を超越し、「現代中国研究」が何をすべきか。国境を超越し、共通の知的空間を形成できるのか。これらの課題に対して多少なりともヒントになればと思った次第であります。

1. 中山竜一先生への回答

リスクに関し、非常に詳しく整理して頂き感謝申し上げます。中山竜一先生のコメントは明確かつ示唆に富んでおり、大変勉強になりました。

1) NGOと地方との関係について

中国の場合、地方政府との対立、問題がほとんどですので、ここでは地方政府との関係に焦点を当てて、話をしたいと思います。NGO全般にとっても言えることですが、特に環境NGOの状況はとても厳しいです。中山先生は日本について言及されましたが、中国の場合、想像をはるかに超えています。地方政府は法律や条例などを無視し、意に沿わないNGOの活動停止、あるいは行政管轄内からの追放行為などが蔓延しているのです。

そもそも、中国の NGO は組織が独立していません。中国では NGO 設立に政府の許可が必要です。また設立後も政府の監視下に置かれています。さらに、中国の NGO は政府の管理下にあり、政治的制約政府の許可がなければ活動ができなるとともに経済的制約(資金調達が困難である)が存在します。

私がここで着目したのは、世界中を見ても非常に厳格な条件下において、中国の NGO は消滅しない、また多くの国際 NGO が中国で活動を展開していることです。「草の根の民主主義」を私は「第3の道」と言いました。「民主主義」と呼ぶと中国ではすぐにアレルギー反応を起こすからです。その理由は大きく分けて2つあると思われます。まず、環境 NGO の取り組みは、人々の生活、健康や将来世代にも直結する自然資源の問題であり、中国では誰もが解決を望むものばかりです。もう1つは、地域の住民との共同活動です。開発独裁主義は、資源の問題や環境問題で行き詰まり、大きな経済格差を生み、人々の信頼を喪失しました。2012年、自然之友(中国最大の環境 NGO)が全国15の都市、5000人を対象にしたアンケート調査を実施しています。結果、彼らが今一番望むことの第1位は、きれいな水・空気(92%)、2位は安定した生活(89%)でした。

これは個人的な理由になりますが、困難な状況下にあっても、現状を変えてゆく勇氣とたくましさが必要だと考えます。また現在、解決が望まれる問題の目標化と目的化の方法論も欠かせません。さらに、私はグローバル環境リスクとして中国の環境問題を理解する必要があると強調しましたが、彼(彼女)らは、東アジアの公的空間と共通の価値観(共生)を創設するために実践しています。

私は、実践は理論に勝ると考えます。なぜなら、実践は学会のためではなく、社会のためにあるからです。税金を使い、自分や学会のために研究する我々に鋭く問い掛けていると言ってもいいかもしれません。

2) 地域固有の歴史, 伝統, 文化と定量的アプローチについて

私は中山先生のご指摘を十分に咀嚼しきれていないかもしれませんが, 地域固有の歴史, 伝統, 文化の視点からの考察と定量的アプローチの採用の両立のための具体的方策と言うよりも, むしろ私が問いたいのは, 地域のための研究や実践であるのか, それとも研究やプロジェクトのための実践なのかということです。これは, 柳田国男の東北論と西田幾多郎の生命哲学をベースにしています。

事例1つを挙げたいと思います。

1990年代の終わり, 日本市場で松茸が高価格で販売されることから, 中国雲南省白馬雪山国立保護区では, 松茸ブームが起きました。保護区内の住民及び周辺住民が森に怒涛の如く押し寄せ, 松茸はたった5年間でほとんど採取できなくなりました。

そこで問題解決に向け, 中国の環境保護 NGO (以下, 「ア」と称す) とイスの環境保護 NGO (以下, 「イ」と称す) が現地に出向きました。そして, それぞれプロジェクト実施に向け, プロジェクトに賛同, 協力してくれる村を探し始めました。

アは, 現地人は環境意識が低く, 自然資源を持続的に利用する習慣もないと判断しました。アが主体となり, まずは環境管理マネジメント・システムを導入, 同時に彼らの中から学歴が高卒以上の者を対象に研修を行い, 経験とノウハウを彼らに伝えました。5年後にはすべてを現地人に移行させるプログラムを組んでいたのです。

しかし, 結果は失敗に終わりました。原因はいくつか考えられますが, 最大の要因は, 現地人のニーズ及び習慣の軽視だと思われます。

一方, イはアと異なる手法を採用しました。イは現地人の9割以上がチベット族であり, 村の2つの寺院に多くの人々が毎日訪れることを明らかにし, 寺院修理などから現地人と関係構築(仲良くなること)に努めました。現地村民との交流を通じ, 僧侶はイが人々に信頼されていることが分かりました。イは, 僧侶たちの協力を得て, 2つの寺院を中心に環境教育の動を行いました。環境教育と言いましたが, その中身はチベット仏教, 彼らの習慣や禁忌

がほとんどでした。さらに、現地人を組織化し、松茸の森を乱開発から自分たちの手で守ると同時に、松茸採取の際、大きさの計測器（小さければ採らない）を使用したり、木材を節約する暖炉の開発など、11以上の「適正技術論」を応用した技術開発を行ないました。プロジェクト開始から5年が経過しました。自然環境は改善され、7年目には松茸は開発前の水準までに回復しました。

アは失敗し、イはなぜ成功したのか。私は検証したことがあります。簡単に言うと、イの成功は、徹底した現地主義と自然資源の価値を外部評価、判断ではなく、現地から引き出す、そして現地の人々及び彼らの意見や考えを尊重し、実現に向けて協力することでした。

アも木材の消費を抑えようと、町の企業に依頼し、節約用の暖炉を導入しようと試みましたが、1つ850元（本来の価格は1100元です。地域住民が購入する際に、プロジェクトから250元の補助金が出ます）は、現地住民にとって大変高額であるため、普及しませんでした。

通常1カ月の木材の消費量：1500～1800キロ

アの暖炉を使用した場合：700～800キロ

イの暖炉を使用した場合：900キロ～1000キロ

ご覧いただけるように、アの暖炉が最も節約効率が高いです。しかし、アは普及しませんでした。一方、イは全世界に普及しました。それは、使用中の暖炉を改造するという手段をもって、技術を村人たちに伝えたからです。改造費は250～300元です。これでしたら村でも修理も可能です。

理論や方法が合理的で美しくても、現地の人々の理解に到達しなければ無意味です。私がこれまでに強調してきたのは、理論の発展と実践のどちらに力点を置くのか、まず考える必要があるということです。実際はというと、実践よりもむしろ理論の発展に力点が置かれていると言えます。

2. 江浦先生への回答

私も『山坳的中国』を読み、中国の環境問題を考え始めました。もう少し正確に言いますと、『山坳的中国』と『西部在移民』(1987年の報告文学)から強い衝撃を受け、環境問題を考えるようになりました。今もシベリア生態研究と中国やモンゴルの環境保護活動に従事しています。しかし、私の環境問題に対する関心は、私自身が遊牧民であったこととも密接に関係していません。

江浦先生のご指摘通り、環境問題の深刻化は、私たちの変化とも関係しています。原稿ではほとんど触れておりませんでした。政府や企業ばかりではなく、私たち自身も環境のためのあらゆる活動や行為を怠ってきました。中国社会が政治・イデオロギーの時代から市場・経済の時代へ転換を迎えたとき、私たちは「革命同志」から大量生産される商品を必死に消費する、すなわち消費者となりました。13億人の消費は、中国、そして世界の環境を大きく変えつつあります。言い換えれば、私たちは「同天闘、同地闘」や「人定勝天」の政治的スローガンが象徴するような、明確な目的意識を備えた自然を改造する時代から、豊かな生活を追求し、そして裕福な生活を享受するだけで自然環境に悪影響を与えてしまう無意識の「環境破壊者」となっていました。そして、教養、学問や研究も大量消費の中で生き残りをかけています。

しかし、この変化は非常に深刻な問題をはらんでいるにもかかわらず、私たちの関心は高いと言えるでしょうか。私たちは消費という巨大な激流に流され、麻痺していませんか。私は原稿の最終部で2人のアメリカ人について触れました。一人は作家、もう一人は科学者です。2人は、自分の目と感覚で中国の大地と見つめあい、関係を結び、そして文学作品、有機農業として結実させました。私の問い掛けは、私たちは成果主義に追われ、より大切なものを見失っていないかということです。つまり、この2人のアメリカ人の我々に対する訴え、それは自分自身の目を疑わないことではないかと思えます。もう1つは、土です。土は中国の運命、いや、アジアの運命を握ってい

と言っても過言ではないです。もし中国の環境問題はアジア，世界にとって高リスクの存在であるのならば，そのリスクの核心は土です。偶然にも，2人のアメリカ人は，100年前に私たちの運命を握る問題（土）について示唆に富んだ思想を残しました。

3．潘宗億先生への回答

潘宗億先生のご指摘にありましたように，ローカルか，グローバルかという選択の問題があります。しかし，なぜこのような選択に迫られているのかを問わなければならないと思います。

私たちが抱える環境問題は地域を超越しています。すなわち，「グローバル環境リスク」として捉えるべきです。これに関して様々な意見があるかと思われませんが，ここで私が問いたいのは，私たちが直面する問題は変化したにもかかわらず，私たちの姿勢はほとんど変わっていないということです。実際，研究は国家の枠組みに束縛され，学問のために学問がなされるという状況に陥っているのです。

私たちが抱えている問題のために，批判され，ある程度のリスクを抱える状況になっても，自分の守備範囲から出ることができますか。新しい「学問」を一から学ぶ勇気を持っていますか。「草の根」運動は，上記で指摘した内容を実践しています。もちろん，課題は山積しており，定かでないことも多いです。それでも私は，人々から出発し，人々のところへ戻りたいと考えています。答えはありません。しかし，今よりもより良い状況，良い選択はありますが，リスクを背負う勇気が不可欠です。